

室町幕府滅亡

その後、義昭と信長の関係が悪化し、元亀4年(1573)義昭は信長に対し拳兵するが、藤孝と光秀は義昭を見限って信長につき、義昭は降伏し、ここに室町幕府は実質的に滅亡。光秀は信長の家臣として軍事、内政に活躍し重臣に抜擢され、近江(坂本城)と丹波(亀山城)に領地を与えられる。

明智光秀と一乗谷攻め

元亀元年(1570)、信長に従い、朝倉攻め(金ヶ崎の戦い)に参戦。光秀は越前に住んでいたことから地元の地理に明るく、窮地に陥った信長軍を無事に撤退させた。天正元年(1573)2度目の朝倉攻めに参戦。一乗谷は焼亡し朝倉氏が滅びる。天正3年(1575)信長に従い、朝倉氏滅亡後の越前にて一向一揆攻めに参戦。

2通の安堵状

天正3年(1575)信長の命を受けた柴田軍等が越前一向一揆掃討作戦を行った際には、府中(武生)を中心に、全ての家々を焼き払い、数万の人々を皆殺しにした。このような悲惨な状況の中、光秀は柴田勝家・勝定に依頼して西蓮寺(東大味)に対して二通の安堵状を出させた。それは自分がかつて住み、家族が親しく過ごした東大味の住民たちを特別に保護し、この地を戦禍から逃れさせるためであった。結局、この二通の安堵状により、東大味の住民は、戦火・無差別殺害、移転使役を免れたと伝わる。



本能寺の変

天正10年(1582)、6月2日、光秀は本能寺の変を起こし、主君・信長を自害させた。光秀が本能寺の変を起こした理由については、従来からいわれているような信長に対する怨恨という単純なものではなく、反信長勢力との関係や信長政権内での派閥争いなどが絡む複合的な要因があったのではなどと考えられているが、どの説も決定的な証拠が無く、現在でも謎である。

山崎の戦い

天正10年(1582)6月13日、主君仇討ちを掲げ、中国地方から引き返してきた羽柴秀吉軍と大山崎で対峙。戦力差から総崩れとなり、光秀は敗走を余儀なくされる。光秀はわずかな供とともに夜陰に乗じて敗走するが、山科あたりで、農民らによって殺害される。享年55歳とされる。

明智光秀と一乗谷

明智光秀の生い立ち

光秀は室町時代に美濃国(岐阜県南部)の守護を務めた土岐氏の一門で、享禄元年(1528)明智城(岐阜県可児市)にて明智光綱の子として出生。天文12年(1543)に元服した後、妻木城主の娘熙(ひろ)子と結婚。弘治2年(1556)美濃の実権を握っていた斎藤家の内紛に巻き込まれ敗者方についた光秀は美濃を追われ、越前に逃れたという説がある。

越前国主朝倉義景に仕官

越前では、称念寺(福井県坂井市)の門前に妻子を仮寓させ、旅に出て文武両道をみがき、特に堺では火縄銃の技術を習得。加賀の一向一揆が越前に襲来した際、光秀は朝倉軍に与し、勝利に貢献。これを機に、朝倉義景に鉄砲指南役として仕官したという説がある。一乗谷朝倉館への大手筋にあたる東大味(福井市)に5年間住み、ここで、娘・玉(ガラシャ)が生まれたとされる。



足利義昭との出会い

永禄10年(1567)に、朝倉義景に上洛の協力を求めて足利義昭が一乗谷を訪れ9ヶ月間滞在。光秀は、義昭の家臣・細川藤孝を通して、義昭にも仕えるようになる。

足利義昭、織田信長の元へ

足利義昭は細川藤孝を取次として尾張の織田信長との間で、京都復帰に向けた交渉を進め、光秀も藤孝の下で信長との交渉を担う。永禄11年(1568)7月、義昭は信長を頼って美濃に移り、藤孝、光秀もそれに従った。永禄11年10月、信長は義昭を奉じて入京し、義昭は室町幕府の15代将軍に就任。光秀も京都に入り、ここから歴史の表舞台に登場することになる。

戦国大名・朝倉氏一族

朝倉氏のはじまり

朝倉氏の祖先は、今の兵庫県養父市の豪族だった。南北朝時代に越前の守護となった斯波氏に従って越前に入り、黒丸城に居を構えた。応仁の乱で、当初は斯波氏側の西軍について戦ったが、後に細川勝元の東軍に寝返って大活躍。文明3年(1471)、斯波氏を追放し越前一国を掌握。三方を山で囲まれた守りの面で軍事環境に適した一乗谷に本拠地を移した。越前朝倉氏の初代・朝倉孝景は、人材登用に心がけ、軍略・兵法に意を注ぎ、揺ぎのない大国を一代にして築きあげた。その後、5代義景まで103年間、越前を統治することになる。

軍事力

3代貞景、4代孝景、5代義景に仕えた朝倉教景(のりかげ)(号して宗滴)の存在が大きかった。朝倉氏の栄光は、この人物に負うことが極めて大きかった。自らの12度に及ぶ合戦経験を側近に語り、筆記録として後世に残し、下克上の世を生きる武将の厳しさを語っている。宗滴は、元治元年(1555)7月、一向一揆を討つため加賀に出陣するが、陣中で病に倒れ79歳で死去。明智光秀は、加賀の一向一揆の際に活躍し、朝倉軍の勝利に貢献したことが認められ朝倉義景に鉄砲指南役として仕官したという説がある。

経済力

朝倉氏の経済力の基盤は直轄地からの年貢であった。古くは奈良時代から大国とされた越前一国から得られる年貢は莫大で、十分な富を蓄えることができた。それに伴って国が安定することで商業が発達し、経済活動も活発に行われた。経済は街を活性化させ、三国や敦賀などの湊町、平泉寺などの宗教都市が発展した。また、そこから得られる税金も莫大であった。本拠地である一乗谷は全国有数の大都市であり、それを物語るように、発掘品には貿易によって得た中国の高級陶磁器や、ヴェネチアンガラスなどといった、当時の一級品が数多く見つかっている。

5代朝倉義景

国を滅ぼした暗君とも言われる義景であるが、その実は儒学を治世の根本とし、小笠原流の兵学を身につけていた。また、文芸にも極めて関心が高く、絵画の他、特に和歌に秀でていたといわれる。越前国を乱世の中で泰平に導き、人々の暮らしを守り、京の公家たちを救援したにもかかわらず、滅亡の憂き目に遭ってしまったのは、稀代の武将織田信長と同じ時代に生まれた不運というしかないであろう。



一乗谷朝倉氏の終焉

信長からの上洛要求を拒んで対立した朝倉義景に対し、元亀元年(1570)4月、信長は織田軍団の他に三河国の徳川家康などの軍勢を京に参集させ、4月25日、越前国の敦賀へ一気に侵入し、金ヶ崎城を一日で陥落。然しながら、浅井長政が窮地に立った朝倉家に呼応し、織田・徳川連合軍の退路を断つ拳にでた。義景は逃げる信長に追撃戦を仕掛けたが、義景の予想を上回って信長の逃げ足は速かった。6月28日、浅井・朝倉軍は姉川をはさんで激突。織田・徳川連合軍が勝利する。

1572(元亀3)年11月、畿内は反織田包围網が将軍義昭によって形成され、朝倉・浅井連合軍に加え、本願寺顕如に率いられた門徒・一向宗徒、延暦寺の僧兵などが信長を取り囲み、甲斐国の武田信玄が上洛を目指して迫っていた。苦慮のあげく、信長は、越後国の上杉謙信を動かし、義景に一旦、兵を引くよう仕向けた。この決断が決定的な敗因となり、鉄壁を誇った反織田包围網の一角が崩れた。

1573年4月、武田信玄が病没。信長は、7月には将軍義昭を追放し、ようやく四面楚歌から脱出。8月、岐阜城を出発した信長は、浅井氏を攻め、救援にかけつけた朝倉勢と激戦を展開し、朝倉軍を潰走させる。13日、朝倉軍は信長の追撃を受け、刀根坂(現、敦賀市)で大敗する。信長軍は、18日に府中(越前市)へ到着。府中に入った信長は、柴田勝家に命じ一乗谷に火を放った。炎は三日三晩燃え続き朝倉氏が百年にわたり治め栄えた一乗谷は地中深く眠りについた。16日、義景は、父祖累代の地、一乗谷に留まることもできず大野郡へと退いたが、重臣の朝倉景鏡に裏切られついに8月20日自害。享年41歳。

現代によみがえる城下町

昭和5年にすでに史跡・名勝指定を受けていた朝倉氏遺跡は、昭和42年、奈良国立文化財研究所（当時）の指導で初めて本格的な発掘調査が行われ、戦国時代の山城と城下町が良好な状態で残されている極めて重要な歴史的価値があると認められたため、昭和46年山城跡を含む延べ278haが国の特別史跡に指定された。

以来、今日まで、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の手で発掘調査が続けられ、当主の館をはじめ、武家屋敷、寺院、職人たちの町屋、さらにそれらを結ぶ道路に至るまで、戦国時代の街並みが当時の姿を残して発掘され、約400年ぶりに深い眠りから目を覚ました。同時に、当時の生活文化を物語る茶器・文具類・火縄銃・文字の書かれた札・職人道具など160万点にも及ぶ貴重な歴史遺産も発見された。

こうした発掘の成果により、遺跡内の主要な4庭園（南陽寺跡庭園・湯殿跡庭園・諏訪館跡庭園・館跡庭園）が国の特別名勝に、遺跡出土品2,343点が国の重要文化財に指定されている。

発掘調査により、一乗谷には当時、京都のような整然とした町並みがあったことが確認されており、この町並みを代表とする武家屋敷と町屋からなる町並み（200メートル）が復原されている。

現在、日本で国の特別史跡、特別名勝、重要文化財の三つの指定を受けているのは、金閣寺、銀閣寺、醍醐寺、厳島神社、平城京跡の6ヶ所しかない。



唐門



朝倉館跡

一乗谷朝倉氏遺跡復原町並

- 開館／9:00～17:00(入場は16:30まで)
 - 休／年末年始
 - 入場料／大人220円
団体(20名以上)220円×人数×0.8(10円未満切り捨て)
70歳以上・障害者手帳をお持ちの方は無料
※一乗谷朝倉氏遺跡資料館との共通券250円
- 【お問い合わせ】☎0776-41-2330[朝倉氏遺跡保存協会]



明智光秀と東大味町

光秀の屋敷跡と伝わる場所に、「あけつあま」と呼ばれる小さな祠・「明智神社」があり、中には高さ13cm程の木彫りの光秀坐像が祀られている。この木像は東大味町の3軒の農家が「生きているのは光秀公のおかげ」と、光秀の像を密かに400年以上守り続けてきたと伝えられている。祠は明治19年(1886)にこの農家の発願で建立された。光秀が柴田勝家・勝定に依頼して出させた安堵状によって東大味は戦禍から救われたが、その後、光秀は戦乱の世の中で主君信長を討ち秀吉に敗れ、「逆臣」の汚名をきせられた。さらに、時代が進み、歴史上から光秀の評価が抹殺されることになった中で、光秀を祀ることは許されることではなく、世の非難、中傷は絶えなかったとのこと。逆臣、裏切り者と称される光秀だが、約10年間身を置いた地、越前に感謝し、住民を思いやる姿こそが、光秀の本当の素顔なのではないだろうか。



明智神社奉賛会

近年、歴史的評価が変わり、400年もの長い期間、たった3軒で守られてきた明智神社の管理が町(区)に移管されることになり、全町民からなる「明智神社奉賛会」を組織し、毎年6月13日(光秀命日)に法要を営んでいる。

西蓮寺

東大味の南西に位置する天台宗の古刹「西蓮寺」には、全国で唯一体といわれる柴田勝家の御木造が安置され、柴田勝家・勝定から西蓮寺に出された「二通の安堵状」が寺宝として残されている。

このパンフレットは、宝くじの「ふるさと情報発信事業」の助成を受け作成されたものです。

【問い合わせ先】
福井市おもてなし観光推進課 ☎0776-20-5346
(一社)朝倉氏遺跡保存協会 ☎0776-41-2330
【監修】福井市立郷土歴史博物館